

物語と説話

—源氏物語を中心として—

高橋 貢

平安時代の物語の中に吉祥天女との恋の記事が何ヶ所か出て来る。その例を左に上げてみよう。

一、宇津保物語「初秋」の中で、朱雀院が仁寿殿御息所と物語る所があるが、その時院は兵部卿のみこについて左のように語っている。

「さらに兵部卿のみこ、かへりて苦しき人なり。見む人に心とめられぬべき心ありて、吉祥天女にも、いかがせましと思はせつべき人なり。」

二、源氏物語では「帚木」で、頭中将の話の中に吉祥天女がとり上げられている。

「吉祥天女を思ひかけんとすれば、法気づき、くすしからんこそ、又わびしかりぬべけれ」

三、狭衣物語では、巻一で狭衣中将が夜な夜な飛鳥井姫君を訪れるのを、お供の人が左のように批評している。

物語と説話 —源氏物語を中心として—

「かゝりつる事なかりつるものを、いかなるさちざう天女ならん、さるはいとものげなきけしきなるを」

一方、平安時代の説話集を見ると、吉祥天女に恋をした話がある。その例を左に上げる。

一、日本靈異記巻中第十三「生愛欲恋吉祥天女像感応示奇表縁」(今昔物語集巻十七第四十五に引用されている)は左のような話である。

和泉国の山寺に吉祥天女の像があった。信濃国の優婆塞がその像に「あなたのような美しい女を下さい」と祈った。するとある夜優婆塞はその像と通じた夢を見た。翌朝起きてみると、像の腰のところがけがれていた。

二、古本説話集第六十二「和泉國々分寺住持艶寄吉祥天女事」は左のような話である。

和泉國の国分寺に吉祥天女像があった。鐘つきの僧がその像に恋をすると、ある夜天女が「お前の妻になろう」と夢に出て言った。夢のお告げに従って男は現われた女と結婚した。のちに男に親しい

女ができる、妻は姿を消した。

物語の中で吉祥天女との恋の記事が記されるためには、その背景として、当時そのような話を実際に人々の間で語られ、知られていたと考えられるが、日本靈異記、古本説話集等にとられている話から、そのような話が人々の間に伝えられていたであろうと言えるわけである。

## 二

すでにいろいろの研究によって考えられているように、説話集以外の種々のジャンルの作品は、素材、発想に関して説話や説話的なものと密接に関係しているが、このことは平安時代の物語についても同様に言うことができる。

源氏物語に例をとってみると、玉鬘をめぐって帝、源氏、兵部卿宮、髭黒大將が競い合う物語には、五十嵐力博士(平安朝文学史(下)九十九頁〜一〇二頁)、岡一男博士(源氏物語事典二六四頁)の御指摘のように、上代の神話伝説以来の妻争いが主要な骨子となっている。また「橘姫」の巻の物語の展開、或は宇治の大君、中君の姿の幻想として、古歌、古伝説で有名な宇治の橘姫がとり上げられている(岡一男博士「源氏物語の基礎的研究」五一―八頁)。また須磨、明石の巻に貴種流離譚の影響があることも認められている(阿部秋生氏「源氏物語研究序説」(下)六九七頁、岡博士「源氏物語事典」二九二頁)。

このように物語の人物、場所、素材、発想等の方面で、説話との関連が見られるが、本論文では物語が説話を素材としてどのように

とり入れているかということを中心に述べる。なお物語では主に源氏物語について述べる。

一、往生を夢に見る話、或は故人が夢に現われる話は源氏物語の中に何ヶ所かある。例えば左の通りである。

①「若菜」では、明石入道が明石上に奉った手紙の中に、西方をさして舟をこいで行く夢を見たこと記している。即ち左の通りである。

「わがおもと、生まれ給はんとせし、その年の二月の、その夜の夢に見しやう、『身づから、須弥の山を、右の手に捧げたり、山の左右より、月日の光さやかにさし出でて、世を照らす。身づからは、山の下のかげに隠れて、その光にあたらず、山をば、廣き海に浮べおきて、小さき舟に乗りて、西のかたをさして漕ぎゆく』となん、見侍りし。」

右の記事に続けて、「内教の心を尋ぬる中にも、夢を信すべきこと、多く侍りしかば」と記している。

②「横笛」では、夕霧の夢に故柏木が現われて歌をよんでいる。「すこし寝いり給へる夢に、かの衛門の督、たゞ、ありしさまの桂姿にて、かたはらにゐて、この笛をとりて見る。夢の中にも、『なき人の、わづらはしう、此のこゑをたづねてきたる』と、思ふに、

「笛竹のふきよる風のことならば末のよながき音につたへなん思ふかた、ことに侍りき」といふを、「問はん」と思ふほどに、若君の、ねおびれて泣き給ふ御こゑに、さめ給ひぬ。」

③「總角」では故八宮が宇治の中君の夢に現われている。

「中君」故宮の、夢に見え給へる。いと、物おぼしたる気色にて、此のわたりにこそ、ほのめき給へれ」と語り給へば、いとゞしく、悲しき添ひて、大君「うせ給ひて後、「いかで、夢にも見たてまつらん」と思ふを。更にこそ、見たてまつらぬ」とて、二ころながら、いみじく泣き給ふ。」

また故八宮は阿闍梨の夢にも現われて、姫君たちのことが気にかかつて往生できないと述べている。

「阿闍梨」『いかなる所におはしますらん。』さりとも、涼しきかたにぞ」と、思ひやりたてまつるを。さいつ頃の夢になん、見えおはしまし。俗の御かたちにて、「世の中を、ふかう厭ひ離れしかば、心とまることなかりしを、いさゝか、うち思ひしことに、乱れてなん。たゞしばし、願ひの所を隔たれるを思ふなん、いとくやしき。すすむるわざせよ」と、いと、定かに仰せられしを。たちまちに、仕うまつるべきことの思え侍らねば、堪へたるに従ひて、おこなひし侍る法師ばら、五六人して、ながしの念佛なん、仕うまつらせ侍る。さては、思ひ給へ得たること侍りて、常不輕をなん、つかせ侍る」など申すに、君も、いみじう泣き給ふ。」

故人が夢に現われて往生を告げたり、或は歌をよむ話は、今昔物語集等の説話集、往生伝、その他の書物、文献に多くとられていた。たとえば今昔物語集にとられている話の中で藤原義孝の往生話（巻第十五第四十二、巻第二十四第三十九）では、義孝は死後、母、妹、賀縁、藤原高遠等の夢に出て、往生を告げたり、或は歌をよんでいゝ。また巻第十四第一「為救无空律師枇杷大臣写法花語」（出典は日

物語と説話 — 源氏物語を中心として —

本往生極楽記）では、无空律師が死後藤原仲平の夢に出て、銭に執着して往生できないことを訴えている。

平安時代に夢が事実として信じられていたこと、及び故人が生きている人の夢に出て往生を告げることが往生の一つの証拠になったことは、左の記事によって言える。

「若適有<sup>二</sup>往生極樂者、依<sup>二</sup>自願力、依<sup>二</sup>佛神力、若夢若覺、示<sup>二</sup>結緣人、若墮<sup>二</sup>惡道、亦以示<sup>二</sup>之。」（二十五三昧式）

平安時代の貴族の日記にも、故人が夢に現われて、往生を告げたり、詩歌をよんだ記事のせている。これらの点から、源氏物語の右の話の背景として、当時、夢が往生の証拠として信じられていたこと、及びそれに関するいろ／＼の話が伝えられていたことを考えることができる。

二、「佛の御なかには、「初瀬なむ、日の本のうちに、あらたなるしるしあらはし給ふ」と、唐土にだに、聞えあなり。」

右は「玉鬘」の中で、豊後の介が玉鬘に初瀬詣でをすすめる言葉の中の一部である。

この豊後の介の言葉の背景には、平安時代に長谷観音の靈験が唐土にも伝わっていたという考え、及びそれに関する何かの話があったろうことを想像させる。日本古典文学大系「源氏物語」の註では、河海抄所載の大唐の僖宗皇帝の後、馬頭夫人が容貌のみにくいのを悲しんで長谷観音に祈った話、及び江談抄卷三所載の吉備真備の話を引用している。この外に今昔物語集の左の話も参考にならう。

①、今昔物語集卷十一第三十一「徳道聖人、始建長谷寺語」に、僧徳道が長谷観音を造った由来を収めているが、この話の後に「凡

ソ、此朝ニシモ非ズ、震旦ノ國マデ靈験ヲ施シ給フ觀音ニ御ス。」と記して、「玉鬘」の一文と同様の思想を記している。<sup>註2)</sup>

②、今昔物語集卷十六第十九「新羅后、蒙國王得長谷觀音助語」は、新羅の后が密通して王の咎を受けた。后は長谷觀音に祈つて、咎の苦を免れた話である。この話の後に「実ニ長谷ノ觀音ノ靈驗不思議也。念シ奉ル人、他國マデ其ノ利益ヲ不蒙ズト云フ事无シ。」という一文がある。なおこの話は宇治拾遺物語第一七九（卷十四第五）に同話がある。

右の資料によつて、源氏物語「玉鬘」と同様の思想、及び関連した話が今昔物語集等にとられていることが分る。

三、A、①、源氏「いづれか狐ならんな。たゞ、はかられ給へかし」〔夕顔〕——光源氏と夕顔との会話の中の源氏の言葉

②、「もし、狐などの変化にや」とおほゆれど、〔蓬生〕——光源氏が末摘花をたずねた時、末摘花側の女達の惟光に對する批評

③、源氏「まことにその人か。よからぬ狐などいふなるものゝ、たはぶれたるが、亡き人のおもてぶせなること、いひ出づるもあなるを」〔若菜〕——よりましの童に移つた紫上についていた物怪に源氏が言う言葉

④、「鬼や食ひつらむ。狐めく物や、取りもて往ぬらん。いと、昔物語の、怪しき、物の事の譬ひにか、さやうなる事も言ふなりし」と、思ひ出づ。〔蜻蛉〕——浮舟の失蹤の理由について母君の想像

⑤、「狐の、変化したるか。憎し。みあらはさむ」〔手習]

——浮舟を見つけた時の横川僧都の弟子の言葉

阿闍梨「こゝには、若き女などや住み給ふ。かゝる事なむある」とて、見すれば、宿守「狐の、仕うまつるなり。この木のもとなむ、時々怪しきわざなむ、し侍る。一昨年秋も、こゝに侍る人の子の、二つばかりに侍りしを、とりて、まうで来たりしかど、見驚かず侍りき」〔手習〕——阿闍梨と宇治院の宿守との問答

右の例はいずれも源氏物語の中の狐に關して書かれた箇所である。右の数例から分るように、狐は人をだまし、女、子供をさらうと考えられている。これは源氏物語だけの考えではない。この考えは平安時代では一般に流布していた考えであつて、今昔物語集にも左のように記している。

「狐ハ変化有者」〔卷二十六第十七〕、「狐ノ其ノ妻ノ形ト変ジテ謀タリケル也。」〔卷二十七第三十九〕、「狐ノ、人謀ラムトテ為ル」〔卷二十七第四十三〕、「狐ノ謀ケルニコソ有ラメ」〔卷二十七第四十四〕

また今昔物語集卷十六第十七、卷二十七第三十七、三十八、三十九、四十一は狐が女や杉に變じて人を迷わす話である。天台南山無動寺建立和尚伝によると、染殿后は狐に悩まされたとも言われている。この外、日本靈異記等にも狐の話はある。——なお河海抄「夕顔」「手習」では、名山記、玄中記、水鏡、帝王系図を引用している。これらの例によつて、平安時代には狐に迷わされるという考えは一般的に広まつており、またそれに関する話もいろいろと伝わつていて、源氏物語にもそれらの考えや話の影響があると考えられよ

う。

B、右の「蜻蛉」からの引用では、狐の外に鬼についても書かれてあった。即ち、「鬼や食ひつらむ。(中略)昔物語の、怪しき、物の事の譬ひにか、さやうなる事も言ふなりし」と記している。

鬼が女を殺したり、奪う話は、平安時代の物語、説話集、記録に左のように収められている。

①、三代実録、仁和三年(887)八月十七日の条によると、武徳殿の松原を歩いていた女性が何者かに殺された。人々は鬼が姿を交えて女を殺したと言った(同話は今昔物語集巻二十七第八にある)。

②、日本霊異記巻中第三十三「女人悪鬼見点攸食敢縁」によると、女が結婚の夜殺された。あとには頭と指しか残っていないかと。人々は神のしわざとも、鬼に食われたとも言った(同話は今昔物語集巻二十第三十七にある)。

③、伊勢物語第六によると、男が女を盗み出して蔵にかくしておいたところ、女は鬼に食われてしまった(同話は今昔物語集巻二十七第七にある)。

右の資料によって、鬼が女を殺したり、奪ったりするという考えや、それに関した話が、平安時代に広まっており、伝わっていたことが言えるであろう。

C、「蜻蛉」の書き出しは、まず浮舟失踪について左の通り記している。

「かしこには、人々、おはせぬを、求め騒げど、かひなし。物語の姫君の、人に盗まれたらむ朝の様なれば、くはしくも言ひつゞけず。」

右の書き出しでは、浮舟の失踪を物語の姫君が人に盗まれたことにたとえている。

日本古典文学大系「源氏物語」の註によると、女を盗む慣習は掠奪結婚の名残と考えられているが、物語、説話にも同様の話は種々見ることができる。同註では伊勢物語第六段、大和物語第一五四段を例として引用している。その外左の話も参考として上げることができよう。

①、狭衣物語巻一では、飛鳥井姫君は狭衣の乳母子式大輔にだまされて九州に連れて行かれるが、途中で入水を企てる。

②、堤中納言物語「花櫻折る少将」では、中将が夜ふけに姫君の家に行つて女を車に乗せて帰る。ところが女は姫君ではなく、祖母の尼であった。

③、大和物語第一五五段は、内舎人が大納言の娘を奪つて逃げ、陸奥国の安積山に庵を建てて住んだ。女は男の留守の時、山の井に姿をうつすと、容貌の変わっているのに驚いて死んだ。この話は今昔物語集巻三十第八に同話がある。

④、更級日記では、帝の娘が火をたく衛士の家を見たく思い、衛士に負われて武蔵国に行つて住んだ伝説をのせている。

以上の例から、貴族の姫君が盗まれる話は説話としても伝えられており、物語にも書かれていたわけであつて、源氏物語の右の一文が書かれた背景として、これらの話があることを考えることができよう。

四、平仲の空泣きの話は「末摘花」「若菜」の巻にある。即ち左の通りである。

「末摘花」では、二条院で源氏がたわむれに自分の鼻に紅をぬると、紫上が拭ってやるが、それに続いて源氏は「平仲がやうに、色どり、添へ給ふな。赤からは、敢へなむ」と言っている。

「若菜」では、源氏が臈月夜尚侍をたずねた時、昔の右大臣の在世の時の華やかな生活を思い出して、「しめゆくと人目すくなき、宮の中のありさまも、『さも、移り行く世かな』とおぼし続けるに、平中が真似ならねど、まことに、涙もろになん。」と記している。

平仲の空泣きの話は、河海抄「末摘花」と古本説話集第十九「平中事」にのっている。ただしこの両書の話は内容に相違がある。例えば古本説話集は河海抄の「我にこそつらさは君が見すれ共人にすみつくかほのけしきよ」という歌をとっていない。また古本説話集の話は河海抄の話に比して、倍以上の分量があつて、筋も複雑である。河海抄所載の話も、石川徹氏（古代小説史稿第二十章「堤中納言物語総考」五〇七頁）の御指摘によると、草稿本系統と覆動本系統とは相違がある。このことによつて、平仲の空泣きの話はいろいろと伝えられていたことが言えよう。なお河海抄では「宇治大納言物語云」として話を記している。

五、「尼上、疾う帰らせ給はなむ。この御碁、見せてまつらん。かの御碁ぞ、いと、強かりし。僧都の君、早うより、いみじう好ませ給ひて、『怪しうはあらず』と、思したりしを、いと、碁聖大徳になりて、『さし出でてこそ、うたざらめ、御碁には、負けじかし』と、聞え給ひしに、遂に、僧都なむ、二つ負け給ひし。碁聖が碁には、まさらせ給ふべきなめり。あな、いみじ」

右は「手習」の中で、少将尼が浮舟と碁をおった時、少将尼の浮舟に対する言葉である。右の中で、横川僧都が碁勢大徳と言われ、浮舟がそれよりまさると評されている。

岡博士著「源氏物語事典」（春秋社）二八五頁で指摘されている通り、花鳥余情「手習」では、碁勢大徳として橘良利（出家名寛蓮）をあげている。寛蓮は西宮記卷十五臨時三「宴遊。囲碁」の条に、「延喜四年九月廿四日、召寛蓮、右少辨清貫等令囲碁。」とあり、花鳥余情によると、延喜十三年（913）五月三日に碁式を作つて献じている。この外二中歴、河海抄にも左の通り寛蓮について記している（大日本史料延喜十三年五月三日条参照）。

二中歴第十三「一能歴。囲碁」

「碁勢寛連 賀陽（以下略）」

説云、碁聖者囲碁上手之稱也。」

河海抄「手習」

「碁勢大徳肥前縣橘良利名也  
寛蓮僧好手也」

寛蓮の逸話については、今昔物語集卷二十四第六、古事談卷六等にある。今昔物語集卷二十四第六「碁擲寛蓮、値碁擲女語」は左の二段の話からなっている。

第一段は醍醐天皇が寛蓮と碁を打つたところ天皇が負け、賭物の金の枕を寛蓮がたまわつた話。第二段は寛蓮は碁の上手な女のために散々に破れた話である。

寛蓮についての記事や話はこのようにいろいろと記されているが、これらのうち、源氏物語「手習」の少将尼の言葉に最もよく適合するのは、今昔物語集の話の第二段と言つてよいであろう。即ち

「手習」では浮舟の暮は横川僧都よりまさっていると書かれている、一方今昔物語集では寛蓮は女のために破れている。

六、「右大将の、いとまめやかに、ことごとしき様したる人の、『恋の山には孔子の倒れ』まねびつべき気色に、うれへたるも、『さるかたにをかし』と、みな、見くらべ給ふなかに、

右は、「胡蝶」で、鬚黒大将の玉鬘に対する懸想文を源氏が見た時の一文である。「孔子倒る」ということわざは平安時代ではよく使われていたと見え、今昔物語集巻第十第十五にも「孔子倒レシ給フ」として出ている。なお日本文学大系「今昔物語集(二)」の補注(三六九頁)によると、源為憲撰「世俗諺文」にも「孔子仆」ということわざをのせている。

今昔物語集巻第十第十五「孔子、為教盜跖行其家怖返語」は左のような話である。

孔子は盜跖という悪人をいましめるために盜跖と逢つて、道理をのべた。ところがかえつて盜跖に言い負かされ、孔子は逃げ帰つた。

この話は宇治拾遺物語第一九七(巻第十五)に同話がある。また世俗諺文にも「莊子云」として、右の話を引用している。

「孔子倒る」と同様の記事は今昔物語集巻第十第九「臣下孔子、道行、値童子問申語」にもある。この話は孔子に関する幾つかの話を集めているが、この中に左の話がある。

孔子が道を行く時、二人の童に逢つた。二人の童は「日が昇る時と日中とは、太陽はどこらが近いか」ということで言い争つていた。二人が孔子に聞くと、孔子はどちらに決定することもでき

物語と説話 — 源氏物語を中心として —

なかつた。二人の童は「孔子ハ悟リ広クシテ不知ヌ事不在サブト  
コソ知り奉ルニ、極メテ悚ニコソ在シケレ」と言つて笑つた。

この話は宇治拾遺物語第一五二(巻第十二)に同話があるが、世俗諺文でも「孔子仆」の一例として「列子傳曰」として引用している。<sup>註6)</sup>

七、源氏物語の中に、印度、中国関係の人に関する話や記事が記されているが、この問題については岡一男博士著「源氏物語事典」(第七章 源泉と素材)でとり上げられている。そこでここではその問題のうち、日本の説話集と関係のある幾つかの話をえらんで述べてみよう。

a、「むかし、胡の国に遣はしけむ女をおぼしやりて、『まして、いかなりけむ。この世に、わが思ひ聞ゆる人などを、さやうに、はなちやりたらむ』など思ふも」(「須磨」——源氏が須磨にいて、都の女性を思い出す箇所)

②、「黄金求むる絵師もこそ」など、後めたうぞ侍るや」(「宿木」——薰君に対する宇治中君の言葉)

右は王昭君について記している箇所である。王昭君の話は有名であつたと見えて、いろいろの書物に見える。たとえば俊秘抄、奥義抄巻中今昔物語集巻第五「漢前帝后王昭君、行胡国語」、唐物語で王昭君の話がとり上げられている。また物語では宇津保物語「初秋」、勅撰和歌集では後拾遺集巻十七、漢詩集では和漢朗詠集巻下「王昭君」等にも王昭君に関する物語や歌、詩をのせている。

③、楊貴妃に関する話や記事は桐壺等に多く見える。楊貴妃の話は平安時代では最も著名な話の一つであつて、それに関する話、記

事、歌等は物語、隨筆、歌集等で多く見ることが出来る。歌学書、説話集では俊秘抄、奥義抄卷中、今昔物語集卷第十七、唐物語等に  
とられている。

c、「総角」で、宇治大君と中君が故八宮を思い出して話しあう  
中に、左の一文がある。

「この頃、あけくれ思ひ出でたてまつれば、ほのめきもやお  
はすらん。いかで、おはすらん所に、たづね參らん。罪深げなる  
身どもにて」と、後の世をさへ、思ひやり給ふ。人の国にありけ  
む香の煙ぞ、いと、得まほしく思さるる。」

「人の国にありけむ香の煙」について、河海抄「総角」では、「九  
華帳深夜悄悄 反魂香反夫人魂」という白氏文集の一節を引き、  
「李夫人うせての後漢武帝甘泉殿の裏に彼貌を凶して方士をして靈  
薬を合せしめて金炉に焚しかは香の煙の中に夫人の姿みえし事也」  
と解説している。唐物語にも「反魂香」として、李夫人の話をの  
せている。また、金沢文庫所蔵「言泉集」⑨第六冊（表紙欠）で  
は「反魂香事」と題し、「或雙紙云」として次の話をのせてい  
る。

唐土のある国に反魂香という木があった。この木の枝を焼く  
と、煙が死人を連れて来るといふのであった。漢王の后が死んだ  
時、この木を焼いて、漢王とまみえた。

反魂香という木については、花鳥余情「総角」でも「反魂樹」と  
してのせている。

d、「斧の柄さへ、あらため給はんほどや。まち遠に」（松風）

「けちかう、うち静まりたる御物語、すこしうち乱れて、千年

も見きかまほしき御有様なれば、斧の柄も朽ちぬべけれど」（松  
風）

「斧の柄も朽たいつべう思ひつゝ、日を暮らす」（胡蝶）

源氏物語には、右のように何ヶ所か斧の柄のくちる記事が記され  
ている。

斧の柄がくちる由来について、河海抄「松風」では晋王質の故事  
を引用している。歌学書では、俊秘抄に「斧の柄はくちなば又もす  
げかへむうきよのなにかへらすもがな」の歌の註として、また和  
歌色葉では「ふるさとほみしごともあらずをのゝ柄の朽ちし所ぞ恋  
しかりける」の註として、晋王質の故事を引用している。

物語、隨筆では例えば左の通り記している。

①、宇津保物語「楼の上」下では、俊蔭女が琴を引く箇所の中で、  
（うちの御使も、山中に入りて多くの年をすゞしけむためしのやう  
に覚えて、帰りまゐるべき心地もせであたり。」と記している。

②、夜の寢覚巻四では、寢覚上が内大臣に「あが君、いまは、い  
つもくたゞ御心なり。とくいで給て、こよひもまかでぬべく奏し  
給へ。姫君のこひ侍なるも、げにあまりたち離れて、斧の柄くちらに  
けるも、いと心ぐるしう」と言っている。

③、枕草子七十四段に、来訪者がなか／＼帰りそうもない時の供  
の人達の様子について、「供なるをのこ・童など、とかくさしのぞ  
き、けしき見るに、「斧の柄も朽ちぬべきなめり」と、いとむつか  
しかめれば、長やかにうちあくびで」と記している。

右の資料から「斧の柄がくちる」ということは、平安時代ではこ  
とわざのようになっていたことが分る。



以上、源氏物語の中の物語や記事を他の説話集、記録等と比較することによって、同様の考えや話、故事、ことわざが、同時代の他の書物、文献に記されていることが明らかにになった。

紫式部が以上あげた話を全部知っていたかどうかは分らないが、源氏物語の中に記事や話が記されていることと、同様の記事や話が他の書物に記され、また当時流布していたであろうこととは無縁とは言えない。

### 三

右以外にも、源氏物語の中に、世間話、伝説、故事、或は印度、中国関係の人の話の影響と思われる箇所があるが、紫式部はそれらの話をどこからとり入れたのであろうか。

紫式部が経典や書物を読んで、そこから知識を得たであろうことはもちろん考えられる。例えば紫式部日記によれば、夫宣孝の所蔵している本を読んでいるし、中宮に白氏文集を講義している。それ以外に左のような機会があったことも見逃がすことはできない。

第一に、以前述べたことがあるが、当時、僧や貴族がいろいろと話を語る機会が多かったようである。第二に紫式部日記や枕草子（例第八十二段「頭の中將の、すずなるそら言を聞きて」）によると、殿上人が漢詩や故事のやりとりをしている。

このように話や故事をとり入れる機会が多かったと思われる。それら以外に、ここでは源氏物語の中から二例引用して述べてみよう。

物語と説話 ― 源氏物語を中心として ―

a、「夕霧」で紫上が女について考える箇所があるが、その中に左の一文がある。

「無言太子とか、法師ばらの悲しき事にする、昔の譬ひのやうに、あしき事、よき事を、思ひ知りながら、うづもれなんも、いふかひなし。」

右の一文から、僧が何かの席上で譬え話を語ったであろうと考えることができるが、その中には無言太子なり、或は源氏物語にとられている経典の中の話があったかもしれない。

も、「東屋」に、常陸介のもとに若人が集って、「腰折れたる歌合・物語・庚申」をするという一文がある。この物語は本によって「物語合」とあるが（河海抄も「物語合」とある）、この物語について、日本古典文学大系「源氏物語」(田の註(四五四頁))では、「『物語』は、各自が交代に物語をするのであろう。即ち、堤中納言物語の『このついで』の如く、人の噂や話など語る事と見える。」と記している。人々が何人か集って経験譚、靈験譚、世間話をするものがあつたろうことは左の資料からも言える。

⑥、「古事談卷五の「八幡檢校僧都成清事」に左の記事がある。

「鳥羽法皇御灸治ノ時。アツサナグサメサセ御坐サムトテ。御前ニ祇候之人々。巡物語可仕ト。少々利口物語ナド令申之間。粟田口座主行玄。御持僧ニテ祇候。申云。此物語同者佛神靈驗之事ヲ可三語申ニ云々。尤可然之由有勅定。」

この記事によると、粟田口座主行玄は巡物語の際、仏神靈驗のことを語り申すことを提案している。この記事の前後に、成清が熊野権現などの加護を受けた話をしたことを記している。

また今昔物語集卷二十四第二十二「俊平入道弟、習算術語」に、

俊平入道のところで大勢の女房が庚申した夜、一人が「入道ノ君、此ル人ハ咲キ物語ナド為ル者ゾカシ。人々咲ヌベカラム物語シ給ヘ。咲テ目覚サム。」と言つた記事がある。

⑤、古今著聞集卷八「好色」に左の話がある。

後白河法皇の御所で、法皇と公卿、女房が雑談していた時、法皇は「身にとりていみじく思ひ出たるしのびこと何事かありし。かつは懺悔の為をのゝあたり申べし」と仰せになった。そして法皇から順々に経験したことを話したが、小侍従はある夜法皇に召された経験譚を話した。

以上の資料によつて、僧や説経師、或は貴族、女房がたとえ話や比喩因縁譚、人を笑わせる話、経験譚などの話を語る機会があつたことが明らかになった。そこで紫式部は話や故事を、直接出典としての経典、書物によつた以外にも、とり入れる機会が多かつたといふことが言えるわけである。

#### 四

源氏物語が説話や故事をとり入れており、物語の人物、場所、素材、発想等の方面で説話と関連があり、また説話等の影響を受けている点はあるが、源氏物語は説話集とは言えない。即ち説話集と違つて、源氏物語の場合は説話が紫式部の発想、構想の中にこなされ、組み入れられている。

物語と説話との相違は、左の「螢」の源氏と玉鬘との問答からも

言える。

「源氏」さて、かゝる古言の中に、まろがやうに、実法なる痴者の物語はありや。いみじう気どほき、ものゝ姫君も、御心のやうにつれなく、そら覚めきしたるは、世にあらじな。いぎ、たぐひなき物がたりにして、世に伝へさせむ」

と、さし寄りて、聞えたまへば、顔をひき入れて、

玉鬘「さらずとも、かく珍らかなる事は、世がたりにこそは、なり侍りぬべかめれ」との給へば

右の二人の問答から源氏と玉鬘との間の恋の話を、たぐひなき物語にして書いて世に伝えたもの（即ち物語）と、二人の間の話が世がたりとして伝えられた場合（即ち説話）との間に相違があると見ることができよう。

物語と説話の相違について問題とする時に、三宝絵詞の序文を落すことはできない。その序文で、物語について左の通り記している。

「晷はこれ日を送る戯なれど、勝ち負けの太身無端し。琴は復夜を通す友なれど、音にめづる思ひ発ぬ可し。又物の語と云て女の御心をやる物也。（中略）奈加為乃侍従など云へるは男女などに寄つ、花や蝶やといへれば、罪の根事業の林に露の御心もとゞまらじ。」

為憲は春の一日、秋の夜長の退屈をまぎらすものとして、晷、琴、物語をあげている。特に物語は「女の御心をやる物」と見ており、尊子内親王の御心はそれには「とゞまらじ」と記している。もちろん、右の文から為憲が物語の価値を否定しているとはいえない

い。しかし竜樹菩薩の偈（もし絵にかけるを見ても人のいはむを聞ても或は経と書みとに随て自ら悟り念へ）によって、為憲が三宝絵に集めた話は、經典、或は家々の文、日本靈異記からの引用であつて、物語からは引用していない。この点、為憲は物語と説話に相違を見ていたということは言えよう。

以上、源氏物語を中心として、物語と説話との関係を述べた。以上述べた内容を要約すると、物語に見える話や故事は同時代の説話集、或は他の書物にとられている場合が少なくないこと、そこでそれらの話や故事は当世人々の間に流布していたらしいことを述べた。第二に紫式部がどこから話や故事をとったのかという点、書物から知識を得たと共に、人々から話を聞く機会も多かったであろうこと、第三に物語と説話との相違について言及した。

注1、西尾光一氏は「中世説話文学論」（埼選書）で左の通り述べておられる。

「中世文学において、軍記物語をはじめ他の多くのジャンルが、素材に関しても、発想についてみても、説話や説話的なものを濃厚に包含していることは、中世はじめに当るこの時期の説話文学が、中世文学全般に対して、地盤的な位置と意義とをなっていたと言えないであらうか。」（九十九頁）

西尾氏は中世文学に関して述べておられるがこのことは平安文学についても同様に言うことができる。

2、今昔物語集卷十一第三十一の一文が「玉鬘」と共通の思想を

持っていることは、日本古典文学大系「今昔物語集」頭注で指摘している。

3、伊勢物語第六が「夕顔」巻に発展していることについては「源氏物語事典」（春秋社）二四五頁に記している。

4、三宝絵詞序文に記された源為憲の物語観については、上坂信男氏「源為憲の物語観」（平安朝文学研究昭和三十六年一月）がある。

5、左に河海抄「玉鬘」に引用している話を記す。

「大唐傳宗皇帝后馬頭夫人敬宗形のみにくき事をなげき給けるに仙人のをしへによりて東に向て日本國長谷寺觀音に祈請し給けるに夢の中に一人の貴僧紫雲に乗て東方より來て手をのへて瓶水を面にそくとみて忽に容貌端正に成にけり是によりて乾府三年丙申七月十八日侍女を引率して明州の津に出向ひて十種の宝物を奉らると云々又吉備大臣入唐時長谷寺觀音住吉明神に祈請して野馬台をよみけるに靈場あるよし江談に見えたり」

6、河海抄「胡蝶」に「こひの山にはくしのたふれまねひつへきけしきにうれへたる」として、左の話を引用する。

「裏書云孔子東荆山の下に遊しに道に三人の小兒ありて土を掘て城をつくる孔子曰車の道をさるへし吾過といふ小兒の曰吾聞聖人は上天命を知り下人情を覚る從古至今車まきに城をさるへし城何車をさらんと孔子車をとめて地におりき此等を孔子のたふれとはいふにや（中略）『柳下惠か弟盜跖と孔子との事を云り』」

7、「説経師と説話」(国文学研究 昭和四十年三月)、「説話の伝承者——貴族の場合——」(文芸と批評 昭和四十年六月)

#### 後記

源氏物語以後の物語になると、説話の直接的引用、影響は少なくなる。このことに關して、三谷栄一氏は昭和四十四年十二月七日の説話文学会で、源氏物語によつて物語というジャンル意識が確立したためであると述べられた。

#### 付記

本論文で使用した本文は左の通りである。

大和物語、宇津保物語、源氏物語、狭衣物語、夜の寢覚、堤中納言物語、枕草子、日本靈異記、今昔物語集、宇治拾遺物語、古今著聞集は日本古典文学大系に、古本説話集は岩波文庫に、三宝絵詞は三宝絵略注に、三代実録、古事談は新訂増補国史大系に、天台南山無動寺建立和尚伝、世俗諺文は正統群書類従に、河海抄は国文註釈全書にそれぞれよつた。